

【研究報告】

看護実践から見出した外来看護師の能力

廣川 恵子*1・大久保 八重子*2・植田 喜久子*1

【要旨】

研究の目的は、外来看護師の語る看護実践から外来看護師の能力を明らかにし、外来看護師の役割を考察することである。研究方法は外来看護師 10 名に半構成的面接をし、質的帰納的に分析を行った。その結果、外来看護師が役割を遂行するために活用している能力として、【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】、【関わる時間を捻出する能力】、【外来受診の間に看護を実践する能力】、【関係性を築き継続していく能力】、【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】、【自分自身の看護を振り返り考える能力】が抽出された。外来看護師の役割は、外来受診中に看護の必要性のある患者を見つけ出し看護実践を通して関係性を継続すること、看護実践において大切にしていることや目指す看護を持ち、病いと共に生きている患者と家族の気持ちに思いを寄せ、安らぎのある日常生活を送れるよう支えることである。

【キーワード】 外来看護師, 能力, 看護実践

はじめに

外来看護の特徴は、外来患者に限られた時間で診察や検査などを受け帰宅して行くこと、患者の抱える問題が見えにくい上に、より社会生活や家庭生活と密着していること、自宅でセルフケアできるよう生活に沿った支援をする必要があることなどが挙げられる(小林, 1998; 林, 2001)。また、生活習慣病など慢性疾患の増加、在院日数の短縮、患者の価値観の多様化、医療の進歩などに伴い、外来看護の対象は重症化、複雑化する一方である(林, 1990, 畠中, 2000, 小栗, 2005, 数間, 小林, 2005, 野中, 2006)。従来ならば、入院治療していた患者が、外来通院しながら自宅で生活をするという状況も珍しくない。

このような外来看護の特徴や変化に伴い、外来看護師にはますます専門性が求められる。専門性とは、特定の分野における特殊性や特定の分野で携わる役割・機能(由井, 2006)である。これまで、外来看護師の役割として、変化によりよく適応できるように支援し継続的に対処する役割、医師の指示に基づき医療行為を行いその反応を観察する役割、緊急事態に対する効果的な対応を行う役割(数間, 小林, 2005)、患者の自己管理を支援し在宅療養を可能にする役割(畠中, 2000)が示されている。また、市橋(2001)は、がん専門病院において訪問看護を

行っているがん患者および家族に面接を行い、外来看護師の役割を明らかにしている。しかし、一般病院における外来看護師の看護実践から能力を明らかにし、役割を考察した研究は見当たらない。

外来看護の対象は重症化、複雑化している反面、外来における看護職員の配置定員は患者30名につき1名である(医療法施行規則第19条)。さらに、7対1入院基本料の新設で、病棟の人員配置が増え、外来看護師が減少傾向にある(吉田, 2007)。看護職者がキャリアについて悩んでいることのうち、最も多いものは専門性の不確かさであった(グレッグ他, 2005)。また、臨床看護師はキャリアを発達させていくプロセスの中で、自己の課題を認識し、専門性の追求を行なっていることが明らかになっている(グレッグ, 池邊, 池西, 林, 平山, 2003)。すなわち、看護師が専門性を明確にしていくことは、キャリアを発達させていくプロセスにおいて重要である。外来看護師が日々行なっている自らの看護実践の中から能力を明確にし、役割を見出すことは、外来看護師がキャリアを発達させていく際の方向性を示すことができる。外来看護師がキャリアを発達させていくことは、役割が拡大している外来において質の高い看護を提供していくために必要である。

また、一般病院における外来看護師の役割を明らかにすることは、外来看護師の専門性を高めるため

* 1 日本赤十字広島看護大学 * 2 三原赤十字病院

の継続的な学習プログラム開発の一助となる。

研究目的

1. 外来看護師の語る看護実践から、外来看護師の能力を明らかにする。
2. 明らかになった能力から、外来看護師の役割を考察する。

用語の定義

外来看護師：一般病院の外来に勤務する看護師。

外来看護師の能力：外来看護を担っている看護師が看護実践をしていくために必要なちから。

研究方法

1. 研究デザイン：質的・帰納的アプローチによる因子探索型研究方法。
2. 研究対象者：一般病院Aに勤務する外来看護師で、外来看護を3年以上経験しており、本研究の参加に同意の得られた看護師10名とした。
3. データ収集期間
2007年1月から8月までの8ヶ月間。
4. データ収集方法

研究者自身が作成した半構成的インタビューガイドを用い、面接法によりデータ収集を行った。データ収集に先立っては、対象者の条件を満たす看護師3名に対して予備的面接を行い、インタビューガイドを修正した。質問内容は、①いままでの勤務のなかで、長く関わったり印象に残っている看護場面、②どのようなことを考えて看護実践をしているかとした。面接は研究者1名で行い、面接の内容は対象者の了解を得たうえでテープに録音した。面接内容は終了後、逐語録にした。

5. データ分析方法

逐語録を何度も繰り返して読み、全体の流れをつかんだうえで、外来看護師としての役割を遂行するために活用している能力が語られているローデータを抽出した。抽出したローデータは、文脈を損なわないようにコード化した。その後、各コードを類似したものでまとめ大中小カテゴリーに分類した。分析に際しては、外来看護経験年数5年以上の看護師および質的研究手法による研究経験を有する研究者で繰り返し検討を重ね、信用可能性(Holloway & Wheeler, 1996/2000)の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

対象者に対して個別に研究の目的、意義、方法を文書および口頭で説明し協力を依頼した。研究への参加は自由意志によるものであり、面接への

不参加を選んだ場合でも今後の業務に不利益を被ることはないこと、対象者および対象者が語った患者のプライバシーを保護すること、データはすべて鍵のかかる場所で保管すること、研究に参加するか否かは誰にも公表しないこと、個人が特定されない形で学会等に発表する予定であることを文書および口頭で約束し、同意書を得た。なお、研究終了後、データはシュレッダーにかけて処理することとした。

結 果

1. 対象者の概要

対象者の性別はいずれも女性で、平均年齢は45.2歳であった。対象者が担当する外来は、内科3名、外科2名、放射線科、産婦人科、耳鼻科、泌尿器科、整形外科各1名であった。外来看護の平均経験年数は11年であった。

また、対象者の勤務する病院は16の診療科があり、外来看護師はパート4名を含む25名であった。平成18年度の1日平均外来患者数は約540名であった。

2. 外来看護師が役割を遂行するために活用している能力

外来看護師が役割を遂行するために活用している能力として、【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】、【関わる時間を捻出する能力】、【外来受診の間に看護を実践する能力】、【関係性を築き継続していく能力】、【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】、【自分自身の看護を振り返り考える能力】の6つの大カテゴリーと、40の中カテゴリーが抽出された(表1)。なお、文中の【】は大カテゴリー名、《》は中カテゴリー名、「」はローデータを表す。看護師が語ることばのうち、方言、指示語そして文脈からことばを加えないと伝わりにくい部分には研究者がことばを補完し()で示した。

1) 外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力

【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】は、患者が外来にいる、その間に、看護の必要性が高い患者を多数の患者のなかから捉えるちからを意味する。これには、《患者の姿勢や言動、表情から瞬時に重症度や緊急度を捉える》、《処置内容や疾患から看護の必要性を判断する》、《看護師から近づいていかないとわからないことがあることを知っている》、《患者をみて気になったことを、患者自身に確認する》、《一度待てると判断した患者も気にし続ける》、《いつもの様子と比較

表1 外来看護師が役割を遂行するために活用している能力

大カテゴリー	中カテゴリー
外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力	患者の姿勢や言動、表情から瞬時に重症度や緊急度を捉える
	処置内容や疾患から看護の必要性を判断する
	看護師から近づいていかないとわからないことがあることを知っている
	患者をみて気になったことを、患者自身に確認する
	一度待てると判断した患者も気にし続ける
	いつもの様子と比較することや、障がいの程度から看護の必要性を判断する
関わる時間を捻出する能力	外来の患者全体に目を向ける
	気になる患者と関わる時間を作り出すために、患者の動きや周りの状況を見ながら、自分の業務の流れを調整する
	患者の受診目的を把握したうえで、自分の時間が取れる時間帯に受診するよう計画的に調整する
外来受診の間に看護を実践する能力	忙しくても3~5分あれば話はあると思う
	外来での様子から日常生活のことを考える
	点滴や処置のわずかな時間を利用して話をする
	できるだけ安楽にかつ効率的に順番を待てるよう配慮する
	受診の目的が達成されるよう配慮する
	受診していることに気づけるようにアンテナを張り巡らす
	絶対に関わりたい患者を決め、受診中に関わることを諦めない
	必要な情報を意図的に集める
	患者が帰宅するときのことや、在宅でのことを予測し関わる
	患者の心理や反応、状況から予測される苦痛や苦悩を考えて関わる
患者や家族の対処を支援する	
関係性を築き継続していく能力	状況に応じて自分の役割を考え行動する
	前回の受診時に話したことや経過を意識的に話して、つながりを感じられるようにする
	病気以外の話をすることも大切にする
	看護師が患者のことをわかっていると視線やことばで伝える
	患者個々に合った対応をしたり、患者の気持ちを察した対応をするよう心がけて、関係性を継続させる
	患者の表情や言動から看護師に対する患者の思いや関係性の変化を捉える
外来看護において大切にしていることを実践できる能力	看護師の言動が患者との関係性にどのような影響を与えるか知っている
	関心を持ち続け意識的にコミュニケーションをとる
	患者が安心や安楽、安全を感じられるような対応を心がける
	患者個々に合った看護をしたい
	余裕や穏やかな気持ちを持って看護したい
自分自身の看護を振り返り考える能力	患者や家族の気持ちを大切にしよう心がける
	長い人生の一瞬の関わりであるが、どのように関わるかを大切にしたい
	自分自身の看護を振り返り模索を続ける
	自分自身の看護を振り返る
	外来看護に限界やジレンマを感じる
	自分自身の外来でのイメージがある
患者との関わりが自分により影響を与えていると感じる	
患者との関わりを語るができる	
外来看護や診療科による特徴や難しさ、面白さを知っている	

することや、障がいの程度から看護の必要性を判断する》、《外来の患者全体に目を向ける》の7つの中カテゴリーが抽出された。

例えば、「顔色とか動作とか・・・こう、じっと座っている状態とか。(中略)訴えずにだまって座っている人で気分が悪そうにこう・・・で、見ますよね」(ケースE)のように、患者から訴えがなくても《患者の姿勢や言動、表情から瞬時に重症度や緊急度を捉える》ことをしていた。また、「外で横になられている患者さんとか居られたら必ず声をかけて・・・」(ケースJ)や「声をかけてみる。とりあえずね。大丈夫ですか?って言うてみて、ああ、いいですか」(ケースA)のように、《患者をみて気になったことを、患者自身に確認する》ことを行っていた。また、「検体を運ぶたびに(待っている患者のことを)気にして」(ケースD)のように、患者の姿勢や言動、表情から重症性や緊急性が低いと判断しても、時間の経過によって状態が変化する可能性を考え、診察の順番が来るまで気かけ、《一度待てると判断した患者も気にし続ける》ことをしていた。さらに、「網膜色素変性症でだんだん視野が欠けてきて、本当にこうやってこうやって(何かを)探している人とかは、必ず行って声をかける」(ケースE)のように、《いつもの様子と比較することや障がいの程度から看護の必要性を判断する》ことをしていた。

2) 関わる時間を捻出する能力

【関わる時間を捻出する能力】は、受診中の患者に関わるための時間を、やりくりや算段をしてつくりだすちからを意味する。これには、《気になる患者と関わる時間を作り出すために、患者の動きや周りの状況を見ながら、自分の業務の流れを調整する》、《患者の受診目的を把握したうえで、自分の時間が取れる時間帯に受診するよう計画的に調整する》、《忙しくても3～5分あれば話はできると思う》の3つの中カテゴリーが抽出された。

例えば、「中(診察室)に入られたらまた出て来られるチャンスがあるから。目だけは追ってる。採血しながらでもあそこ居られるとか」(ケースA)や、「点滴なんかでも、さっさとしまえばすぐに終わるんだけど、ゆっくりゆっくり準備したりしてね。そういう時にね、話をする」(ケースA)のように、《気になる患者と関わる時間を作り出すために、患者の動きや周りの状況を見ながら自分の業務を調整する》ことをしていた。また、「そういう人は眼底検査をするのはわかっているから、ちょっと遅めに来てくださって来る時間を遅めに言って

あげて話をする」(ケースE)のように、《患者の受診目的を把握したうえで、自分の時間が取れる時間帯に受診するよう計画的に調整する》ことをしていた。さらに、「こっち(採血や注射)の忙しいところを済ませといて注射と注射の間の5分間でもあれば行く」(ケースA)や「3分もあれば大丈夫よって(自分を)納得させて」(ケースA)のように、《忙しくても3～5分あれば話はできると思う》と考えることができていた。

3) 外来受診の間に看護を実践する能力

【外来受診の間に看護を実践する能力】は、患者が外来を受診している限られた時間のなかで、必要な看護を判断して実践するちからを意味する。これには、《外来での様子から日常生活のことを考える》、《点滴や処置のわずかな時間を利用して話をする》、《できるだけ安楽にかつ効率的に順番を待てるよう配慮する》、《受診の目的が達成されるよう配慮する》、《受診していることに気づけるようにアンテナを張り巡らす》、《絶対に関わりたい患者を決め、受診中に関わることを諦めない》、《必要な情報を意図的に集める》、《患者が帰宅するときのことや在宅でのことを予測し関わる》、《患者の心理や反応、状況から予測される苦痛や苦悩を考えて関わる》、《患者や家族の対処を支援する》、《状況に応じて自分の役割を考え行動する》の11の中カテゴリーが抽出された。

例えば、「採血が終わっても自分ではもう押さえられないからしばらく押さえあげている時に話を・・・」(ケースA)や、「点滴するところが少し個室っぽいところじゃないですか。ふたりっきりになるし、あの先生、点滴の前に必ずメイロン40(ml)を静注で入れる指示を出すんですよ。だから、メイロン40(ml)を注射するときが(話す時)」(ケースJ)のように、《点滴や処置のわずかな時間を利用して話をする》ことをしていた。また、「なんとかさんって呼ばれたら、あぁあの人だと思って。こう耳がダンボになってね」(ケースA)や、「絶対この人と話をしないといけないという人がいたら、診察の人に頼んでおく。受付にも言うておく」(ケースA)のように、《受診していることに気づけるようにアンテナを張り巡らす》ことをしていた。さらに、「誰かが採血をしたりして終わって向こうへ出られたときに追いかけて行く。話をしないといけないときは」(ケースA)や「点滴をする方にちょっと待ってもらってでも、この方が優先とかね。あるよね。状況判断がいるよね。絶対ってというのはどういう状況でも作ってるよね」(ケースA)のように、《絶

対に関わりたい患者を決め、受診中に関わることを諦めない》でいた。入院の必要性があると思われる終末期の患者が、帰宅することを希望している場合、「帰るときに・・・もう来たときに車乗ってしんどかったのだから、帰ったらまたしんどくなるよって（中略）でも点滴して楽になった？って聞いたら全然楽になってないと・・・」（ケースC）のように、《患者が帰宅するときのことや、在宅でのことを予測し関わる》ことをしていた。また、「やっぱり入院された方がいいし、絶対に早めに来られた方がいい。もう放っておくのはよくないと（言った）」（ケースF）や「その都度、なんか新しいことがあったらきっちり説明して、こうこうだからこうしないといけないっていうのを・・・一回の説明ではなんかだめなような」（ケースF）のように、《患者や家族の対処を支援する》ことをしていた。さらに、「悪いものじゃないかもしれないけど、一応、悪いもの考えたときは一旦、ちゃんとした先生にかかった方がいいっていうんで、〇〇先生の外来に来てくださって。その段階がやっぱりすごく辛いだろうなって」（ケースH）や「（終末期の患者が）このまま家に帰っても大丈夫かなっていうのがあったからね」（ケースC）のように、《患者の心理や反応、状況から予測される苦痛や苦悩を考えて関わる》ことをしていた。

4) 関係性を築き継続していく能力

【関係性を築き継続していく能力】は、患者と看護師というつながりをつくり、さまざまな工夫や方法でつながりを良い状態で保っていくちからを意味する。これには、《前回の受診時に話したことや経過を意識的に話して、つながりを感じられるようにする》、《病気以外の話をするのも大切にする》、《看護師が患者のことをわかっていると視線やことばで伝える》、《患者個々に合った対応をしたり、患者の気持ちを察した対応をするよう心がけて、関係性を継続させる》、《患者の表情や言動から看護師に対する患者の思いや関係性の変化を捉える》、《看護師の言動が患者との関係性にどのような影響を与えるか知っている》、《関心を持ち続け意識的にコミュニケーションをとる》の7つの中カテゴリーが抽出された。

例えば、「その時（前回の受診時）に話したこととかっていうのは必ずその人に次の時に聞くんですよ。同じように。そしたら患者さんっていうのは自分のことを覚えてもらっている看護師さんってすごい感じがパッと変わって、そのときからまた話がずっと続いていくんですよ」（ケースB）のように、

《前回の受診時に話したことや経過を意識的に話して、つながりを感じられるようにする》ことをしていた。また、「採血（した後）座ったまま、病気に関係なく話していかれるじゃないですか。そういう人の話もそうですよねってとりあえずは何分かは話をきく。そしたら違うと思う」（ケースA）のように、《病気以外の話をするのも大切にする》ようにしていた。さらに、「忙しくて話せない状況のときは、わざと目があうようにして、来られているのはわかっていますよ、任しておいてって（伝える）」（ケースC）のように、《看護師が患者のことをわかっていると視線やことばで伝える》ことをしていた。

5) 外来看護において大切にしていることを実践できる能力

【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】は、外来で看護をしていくなかで、自分自身が大切に思い心がけていることや、どのような看護をしていきたいかという目指す看護を実際にしていくちからを意味する。これには、《患者が安心や安楽、安全を感じられるような対応を心がける》、《患者個々に合った看護をしたい》、《余裕や穏やかな気持ちを持って看護したい》、《患者や家族の気持ちを大切にしよう心がける》、《長い人生の一瞬の関わりであるが、どのように関わるかを大切にしたい》の5つの中カテゴリーが抽出された。

例えば、「安心して帰っていけるような外来ですよ。その中には事故がないとか薬が間違っていないとかいうのが全部含まれますけどね。やっぱり嫌な思いをして帰らないっていうのが一番だと思います」（ケースI）のように、《患者が安心や安楽、安全を感じられるような対応を心がける》ことをしていた。また、「公平さですよ。（中略）言えない方も言えるような雰囲気を持ってみんなが公平に外来の患者さんは同じですよという風な・・・（中略）話し方」（ケースI）や「もうターミナルだから、本人さんの考えが一番だろうし」（ケースC）のように、《患者や家族の気持ちを大切にしよう心がける》ことをしていた。

6) 自分自身の看護を振り返り考える能力

【自分自身の看護を振り返り考える能力】は、自分が日々、どのように看護していたかをあれこれと思い返し、外来看護を捉えていくちからを意味する。これには、《自分自身の看護を振り返り模索を続ける》、《自分自身の看護を振り返る》、《外来看護に限界やジレンマを感じる》、《自分自身の外来でのイメージがある》、《患者との関わりが自分により影響を与えていると感じる》、《患者との関わりを語る

ことができる》、《外来看護や診療科による特徴や難しさ、面白さを知っている》の7つの中カテゴリーが抽出された。

例えば、「(告知が) 衝撃として患者さんに乗った時に自分がどういう風に動けるかなってというのが・・・いつも感じるんですけどね」(ケースH)のように、《自分自身の看護を振り返り模索する》ことをしていた。また、「やっぱり時間がなくていうところが一番(厳しい)」(ケースG)や、「(外来看護は)一瞬だから面白いです」(ケースH)のように、《外来看護や診療科による特徴や難しさ、面白さを知っている》ことが語られていた。

考 察

本研究の結果から、外来看護師は【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】、【関わる時間を抽出する能力】、【外来受診の間に看護を実践する能力】、【関係性を築き継続していく能力】、【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】、【自分自身の看護を振り返り考える能力】を活用して、役割を遂行していた。

これらのことから、外来看護師の役割とは、多数の患者のなかから、外来受診中に看護の必要性のある患者を見つけ出し看護の実践を通して関係性を継続すること、自らの看護実践を振り返り、外来看護において大切にしていることを実践することである。次に本研究の結果から外来看護師の役割を考察する。

1. 多数の患者のなかから外来受診中に看護の必要性のある患者を見つけ出し看護の実践を通して関係性を継続する

本研究において、外来看護師は【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】、【関係性を築き継続していく能力】を活用していた。外来看護師は、自らの視覚、聴覚を使うのみでなく、その患者のいつもの様子や障がいの程度を結び付けて考えるなど、さまざまな方法によって看護の必要性のある患者を見つけ出していた。小林(1998)も、援助の必要性のある人を見つけ出す、援助関係を作り継続する、という2点が成功すれば外来看護は展開されていくと述べている。一見、セルフケアが可能に見える多くの患者の中から、看護を必要とするわずかなサインを捉えることは、外来看護の始まりであり外来看護師の役割と考える。また、外来看護師の多くは外来において、コミュニケーションが重要と考えていた。患者と直接関わることができるのは受診

中の限られた時間であり、関係性は途切れがちになる。そこで外来看護師は、前回の受診や看護師との人間関係のつながりを患者が感じられるよう話す内容を考えていた。話す内容としては、病気に関する話に限らず、旅行や気候、おしゃれの話などであった。終末期がん患者が外来受診をして、看護師と生活の話や家族の話、いままでの人生について話をするには、患者と看護師という関係に止まらず、生活しているひとりの人として向き合うことになる(廣川, 2007)。本研究においても、外来看護師は患者と話をすることそのものを大切にしていた。受診の間隔があいていたとしても、患者と看護師の関係性につながりを感じられるようコミュニケーションをとることは、外来看護師の役割と考える。そして、外来看護師は関係性を継続するために視線や介助といったことば以外の方法を用いて自分自身の思いを伝えていた。さらに、よい関係性を継続させるために、患者の気持ちを察した対応をしたり、患者の思いや関係性の変化を捉えたりしていた。つまり、外来看護師は関係性を築くだけでなく、よりよい関係性を継続させるための工夫をしたり、患者の反応を捉えたりする必要がある。

多数の患者のなかから外来受診中に看護の必要性のある患者を見つけ出し、関係性を継続させることに加え、【関わる時間を抽出する能力】や【外来受診の間に看護を実践する能力】を活用していることが明らかになった。

外来では、多くの患者の中から看護の必要性がある患者を見つけ出し、同時に関わる時間を捻出することにより看護を実践することができる。畠中(2000)も、多くの患者の中から看護を必要としている患者を把握し関わっていく時間を捻出するには、それ相応の看護の力を必要とすると述べている。本研究において、外来看護師はさまざまな場面で、3～5分あれば患者に関わることができるという時間の捉え方をし、わずかな時間を作り出すために調整をしていた。このように、3～5分あれば患者に関わることができるという考え方は、時間を捻出する能力が必要とされる外来において、看護実践の原動力になる。看護実践としては、外来受診中にある処置や検査、起こっている症状に対する看護だけにとどまらず、患者の日常生活、帰宅するときのこと、在宅でのこと、心理や予測される苦痛や苦悩に対する看護、対処の支援を行っていた。

2. 自らの看護実践を振り返り、外来看護において

大切にしていることを実践する

本研究から、外来看護師は【自分自身の看護を振り返り考える能力】を持っていた。そして、外来看護の現状、特徴、難しさ、面白さを知ったうえで、限界やジレンマを感じながらも、どのように看護するかを考え続けていた。また、外来看護師は【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】を持ち、外来受診している患者や家族がどのような気持ちでいるのか、どのようなことを求めているかといった視点を持って、患者や家族が安心、安楽、安全を感じられるような対応を心がけていた。稲岡（1997）は、看護の対象者に寄り添い日常生活を助け、人間の深い内的世界を洞察し、不安や恐怖、苦痛や苦悩を共有し、少しでも安らかに過ごすことができるようにすることは看護の心であると述べている。外来看護師が、病いと共に日常生活を生きている患者と家族の気持ちに思いを寄せ、外来という場で関わり、少しでも安らぎのある日常生活を送れるよう支えることは、外来看護師の役割と考える。

井上（2002）は、看護は何を目指すのかという看護の理念を持って、対象特性はどのような人々であるかに加え、ケアが提供される場の状況、その領域に特徴的なケアの追求が必要だと述べている。外来看護師が、外来看護を実践していくときに大切にしていることを明確に持って、外来受診する患者や家族の状況において外来看護にどのような問題、困難、魅力、可能性があるかを捉え、目指す看護を模索することは、外来看護師の役割であり外来看護の専門性の構築につながると考える。

結 論

外来看護師の役割は、病いと共に生きている患者と家族の気持ちに思いを寄せ、安らぎのある日常生活を送れるよう支えることであった。

外来看護師は、役割を遂行するために【外来受診中の今ここで看護を必要としている患者を見つけ出す能力】、【関わる時間を抽出する能力】、【外来受診の間に看護を実践する能力】、【関係性を築き継続していく能力】、【外来看護において大切にしていることを実践できる能力】、【自分自身の看護を振り返り考える能力】を活用していた。

本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者が所属する診療科や外来看護経験年数は多様である。今後は、対象者の所属する診療科や外来看護経験年数などを考慮して、外来看護師

の役割を明らかにすることが課題である。また、療養の場が多岐にわたっていることから、患者が療養の場を選択していくことを支援する外来看護師の能力や役割を明らかにすることが必要である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力くださいました看護部長をはじめ、インタビューに快く応じてくださいました看護師の方々に心より厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は日本赤十字広島看護大学平成18年度共同研究費の助成を受けて行った。

文 献

- グレッグ美鈴, 池邊敏子, 池西悦子, 林由美子, 平山朝子(2003). 臨床看護師のキャリア発達の構造. *岐阜県立看護大学紀要*, 3(1), 1-8.
- グレッグ美鈴, 林由美子, 池西悦子, 両羽美穂子, 奥井幸子, 上野美智子, 栗田孝子, 宮本千津子, 鎌田亜由美 (2005). 看護職者のキャリアマネジメントのあり方. *岐阜県立看護大学紀要*, 5(1), 3-9.
- 畠中智代 (2000). 変わり続ける外来と当院の試み. *看護管理*, 10(9), 696-700.
- 林啓子 (1990). 患者のニーズに応える外来看護患者ニーズの調査から. *看護展望*, 15(1), 58-62.
- 林啓子 (2001). 外来看護の役割と課題; 外来看護が変われば医療全体が変わる. *看護技術*, 47 (7), 17-21.
- 廣川恵子 (2007) 終末期がん患者や家族にとっての外来通院の意味と外来看護師の役割. *日本赤十字広島看護大学紀要*, 7, 27-34.
- Holloway, I. & Wheeler, S. (1996) /野口美和子(2000). ナースのための質的研究入門(第1版). 171-179, 東京, 医学書院.
- 保健医療六法 平成14年版. 中央法規出版株式会社.
- 市橋麻由美 (2001). 訪問看護を受けているがん患者に対する外来看護師の役割. *神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録*, 26, 395-402.
- 稲岡文昭 (1997). 看護の叢智 ヒューマン・ケアリングの実践に向けて. *日本看護科学会誌*, 17(2), 1-10.
- 井上智子 (2002). 急性期看護の専門性と能力開発. *看護*, 54(4), 83-92.
- 数間恵子, 小林康司 (2005). 在院日数短縮化によるケア必要量の増加とニーズの多様化. *インターナショナルナーシングレビュー*, 28(1), 32-36.

小林美奈子 (1998). 看護のかかわりが必要な患者をどうみつけるか. *看護技術*, 44(13), 20-26.

小薬祐子 (2005). いま外来看護に求められているもの. *クリニカルスタディ*, 26(10), 14-19.

野中みぎわ (2006). 外来看護師に求められる能力と専門性の育成. *看護展望*, 31(12), 37-45.

吉田澄恵, 佐々木由美子, 久保田聡美 (2007). 外来看護をめぐる課題と今後の可能性. *看護管理*, 17(8), 642-649.

由井志穂 (2006). がん専門病院における手術看護の専門性. *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録*, 31, 235-242.

Outpatient Nurses Ability Found in Their Practices

Keiko HIROKAWA*¹, Yaeko OKUBO*², Kikuko UEDA*¹

Abstract:

Background : Clarifying the roles of outpatient nurses is important to the career development process.

Purpose : The purpose of this study was to explore the abilities outpatient nurses employ in their practices and to clarify the roles of outpatient nurses.

Method : A semi-structured interview was used on 10 outpatient nurses and qualitative-inductive analysis was employed.

Findings : As a result, the outpatient nurses' abilities which have been exercised to complete their roles were extracted: [the ability to identify the patients who require prompt nursing attention during their outpatient visit], [the ability to manage the time to work with patients], [the ability to perform nursing practice during patients' outpatient visit], [the ability to build and maintain the relationship with patients], [the ability to practice nursing care possessing their own value in outpatient nursing], and [the ability to review and examine the results of the nursing care they have performed].

Conclusions : Nursing roles in outpatient settings refers to identifying the patients who need immediate nursing attention during their outpatient visit and maintaining the relationship with them through the nursing practice, possessing a goal for the nurses' own value in their nursing practice, and caring for the patients and families who live with illness as well as supporting them to live everyday life with comfort.

Keywords:

outpatient nurse, ability, nursing practice

* 1 The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing * 2 Mihara Red Cross Hospital